山田 邦子さん

Yamada Kuniko

この人 INTERVIEW 素敵な話

（やまだ　くにこ）

昭和35年東京生まれ。56年、テレビドラマ『野々村病院物語』でデビュー、同時にバラエティ界にデビュー。以後、司会・ドラマ・舞台・講演・執筆等マルチな才能を発揮、NHK“好きなタレント”調査では8年連続第1位を記録。平成19年、健康番組出演がきっかけで乳がん罹患を発見し、手術を経て仕事に復帰。その後はがんについての講演なども精力的に行い、また20年には、がん撲滅を目指す芸能人チャリティ組織「スター混声合唱団」を結成し団長を務めている。
20年に発足した厚生労働省「がんに関する普及啓発懇談会」メンバー。

●聞き手　鎌田光明・厚生労働省広報室長
●撮　影　山本祐之

待たされました。待合室は人であふれかえっていて「乳がんの人はこんなに大勢いるのか」と思いました。放射線科に移ったら今度はほかの病気の方も来ますから「こんなに具合が悪い人が多いのか」と思いました。

先生たちはこちらが心配になってしまうぐらい、いつも疲れていますね。かわいそうだなと思いますけれども、頑張ってもらうしかないです。

医師が足りているところと足りていないところの差があるのではないですか。誰しも良い病院で診てもらいたい。でも私がこんな話をすれば、「乳がんだったらS病院に行こう」となってしまって、また同じ病院ばかりが混んでしまうのですが。

医者との信頼関係を築くには

――手術の際に「誰に最後の判断を任せますか」と聞かれたときに、ご主人ではなく「先生」とおっしゃったそうですね。

山田　がん患者は、なろうと思ってなったわけではなく、大概は初めての経験で、何も分からない初心者です。先生たちはプロですから「どちらにしますか」と常に選択させるのです。胸のことも「全摘しますか、温存がいいですか」と聞かれても分かるわけがないですよ。

いつも「AとBがあります、どちらがいいですか」です。私はしゃべる商売で生きてきましたから、「先生はどちらがいいと思いますか?」という感じですぐに対応できましたが、一般の人は悩んでしまいますね。

それで手術のとき、麻酔のことなど分からないのに、当たり前のように誓約書を書かされますね、「万が一のときはごめんなさい」というような（笑）。仕方がないので署名しますが、わけが分からなくなっているところに、「誰に一任しますか」と聞かれます。普通は旦那さんの名前を書くようですが、考えると、うちの旦那はおろおろするばかりでたぶん正確な判断はできないだろう、そうだ、手術中だからと思って、先生の名前を書いたら、「そこは違います」と大笑いされました（笑）。

――医師に話したいというその気持ちはありますね。

山田　患者はそのぐらい何をしていいか分からないのです。でも、恥ずかしがらずにどんどん質問をして、痛いときは痛い、具合が悪いときは具合が悪い、不安なときは不安と、ありのままに言ったほうがいい。先生はその中からヒントを得るかもしれないし、私はそうやって先生と信頼関係を築いてきました。

でも病院のあの混みようでは、先生と1時間話すことは無理ですね。10分とか15分ですから、不安が取り除けないときがあります。私は同じ病気の人同士で話すことで元気になれたので、どうせ何時間も待つのなら待合室の横にサロンのようなものがあったらと思います。この次の医療ですね。

いくら温存で、美容整形をしたのではないかというぐらいきれいな術後の胸でも、傷はあります。何でもなかったときの胸と比べればひどい傷ものなんです。先生方が見ると「素晴らしい出来映えだ」と言うのですが、それは医学的にということですね。先生とこれ以上話すことは無理なんです。そうなったときに、患者同士で話したり、あるいは女の先生でカウンセラーを兼ねるような人がいれば、例えば胸を気にして夫婦生活がうまくいかないというような話でもできるわけです。